

新都市社会技術融合創造研がセミナー

6プロジェクトを発表

藤井京大大学院教授の講演も



大西委員長



講演する藤井教授

都市環境などをテーマに、産・学・官が技術の融合・創造を目指して研究を進め、都市社会全体に貢献しようとする「新都市社会技術融合創造研究会」（委員長：大西有三京大副学長）は10日、大阪市中央区の大阪合同庁舎1号館第1別館2階大会議室で「第7回新都市社会技術セミナー」を開いた。写真。

は10日、大阪市中央区の大阪合同庁舎1号館第1別館2階大会議室で「第7回新都市社会技術セミナー」を開いた。写真。

新たな技術の普及や今後の研究の促進に結びつけるのが狙い。午後1時から開かれたセミナーには約250人が参加。豊頭、大西委員長が「今回のセミナーでは六つの研究中のテーマについて発表するが、本年度はさらに13のプロジェクトがスタートする。セミナーを通して最新の技術の開発・検討状況、またほかに問題があるかなどといったことを広く普及し、今後の研究や開発に生かしていきたい」とあいさつした。

引き続き、藤井聡京都大学大学院工学研究科教授が「今こそ、国債の大量発行と、大規模な公共投資を」とテーマに講演。藤井教授は現在の公共事業の置かれている立場に

ついて、同調を求める社会的圧力によって少数派が沈黙を余儀なくされていく「沈黙の螺旋理論と同じだ。困った人しか声を上げない」と述べ、もっと関係者が声を出すべきだと指摘した。また、日本の国債の金利を見れば「今こそ国債を大量に発行して、子ども手当のような経済効果の見込めない財政出動ではなく、貯蓄に回りにくく、かつ直接的に雇用を創出する公共事業などに財政支出動するべきだ」と強調。「数十兆円規模の財政出動で、まずデフレを止める必要がある」と話した。

このあと、進行中のプロジェクトの発表に移り、▽既設橋の最速延命化方策の評価・策定に関する研究（富川豊章京都大学大学院工学研究科教授）▽景観性に優れたアーチカルバートを用いた盛土構造に関する研究（岸田潔京都大学大学院工学研究科准教授）▽アンカー工設置のり面の健全性評価に関する研究（沖村孝神戸大学名誉教授）▽舗装用骨材資源の有効利用に関する研究（山田優大阪市立大学名誉教授）▽積雪寒冷地における舗装の耐久性向上および補修に関する研究（小林健司京都大学経営管理大学院院長）▽物理探査の連続計測による斜面地盤の工学的評価手法に関する研究（梶見晴重関西大学学長）が各プロジェクトリーダーから発表された。

6プロジェクトの成果報告

第7回新都市社会技術セミナー

産学官が連携して新技術の研究に取り組む新都市社会技術融合創造研究会(委員長・大西有三京大副学長)は10日、第7回新都市社会技術セミナーを大阪市内で開き、「舗装用骨材資源の有効利用に関する研究」など6プロジェクトの研究成果を報告した。大西委員長は「このセミナーでは展開中の研究プロジェクトについて、技術開発の状況や課題などを一般から専門家まで広く発信することで、今後の研究活動に生かすことを目的にしている。本年度も多数の研究プロジェクトが発表したが、皆さんも関心があればチームに参画してもらい、土木技術発展に貢献してほしい」とあいさつ。



大西委員長

続いて、京都大学大学院工学研究科の藤井聡教授が「今こそ、国債の大量発行と、大規模な公共投資を」と題した特別講演を開いた。藤井教授は「ムダとされる公共事業だが、直接的な雇用を創出し、経済効果や地域発展につながることは明確。建設産業は景気が良いときは民需が多く、官需に頼らなくても済んだが、民需が減っているときは官需を足してデフレを止める必要がある」と述べた。セミナーでは▽既設橋の最速延命化方策の評価・策定▽景観性に優れたアーチカルバートを用いた盛土構造▽アンカー工設置のり面の健全性評価▽舗装用骨材資源の有効利用▽積雪寒冷地における舗装の耐久性向上および補修▽物理探査の連続計測による斜面地盤の工学的評価手法に関する研究の成果が発表された。

新都市社会技術融合創造研究会